昭和四年六月二十九日第三種郵便物認可
昭和五年二月二十日發行（毎月一回二十日發行）

第九號

演藝月刊

第九輯

婦人の便秘に

婦人は種々な原因の爲に便秘を起し易く便秘者は絶えず頭痛、眩暈、嘔心、腹部緊張鼓腸等を起し不愉快なるは勿論身体に悪影響を與へるものなり、故に便秘ある婦人はラキサトールを用ひて便通を調節すべし。

下劑

ラキサトール

粉末錠劑、全國藥店にあり

發賣元 大阪市東區道修町
株式會社 塩野義商店
東京市日本橋區岩附町

I.O.116

第九輯目次

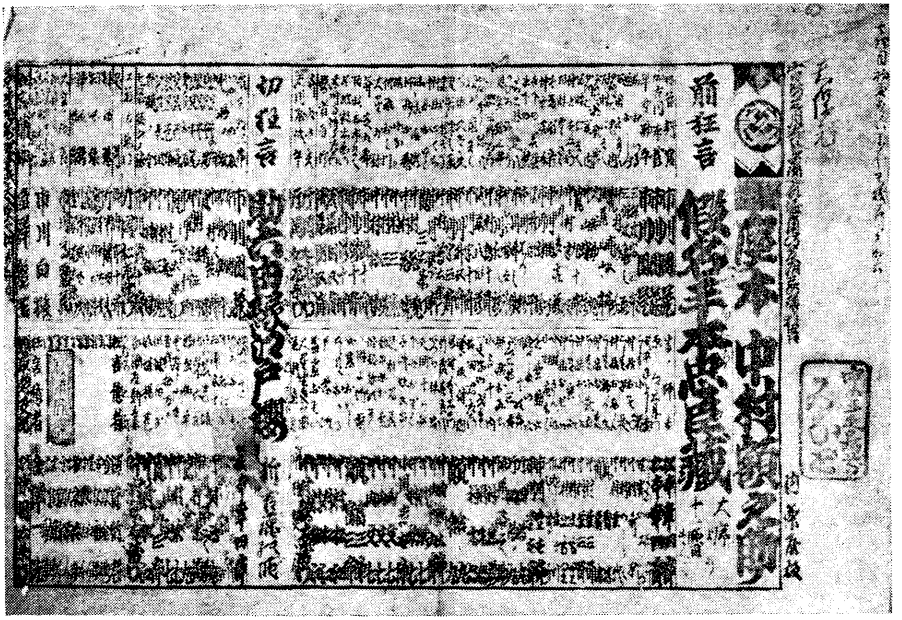
題　簽……入江　之介（表紙）
京阪の助六興行年表……秋葉　芳美（一）
京阪における「切られ與三」の狂言……秋葉　芳美（七）
文樂座の怪しい記念出版……石割松太郎（一〇）
文樂座の國性爺……石割松太郎（一四）
涙花座の國性爺……石割松太郎（一八）
駈足の忠臣藏……石割松太郎（一九）
劇評の劇評……石割松太郎（二二）
編輯後記……石割松太郎（終頁）
◇
染太夫日記……（三九—四六）

京阪の『助六』興行年表

秋葉　芳美

歌舞伎十八番の——助六興行年表、又は年代記風なものには、古い處で「役者助六噺」（天明二年六月中山清七板）や立川焉馬の「江戸紫眞貧鉢卷」（文化八年七代目團十郎初役記念出板）等があり、明治に入つて默阿彌翁の「助六興行年表」や關根只誠翁の「戯場年表」（の中の「助六」に關する條）等がある。更に又、近くでは故岡村柿紅氏の「助六雜話」（演藝畫報大正四年五月號「助六興行年表」の條）や黑木勘藏氏の「助六興行年表」（「近世演劇考說」）、さては渥美清太郎氏の「助六の由來」（「歌舞伎狂言往來」）等いふ名編があるので、既に究め盡くされてゐる觀がある。併し、私の遺憾に思ふことは、上記の「役者助六噺」から「戯場年表」までの諸編はともかく、岡村氏の「助六雜話」から渥美氏の「助六の由來」に至るまでの三名編を以てしても、尙且つ、誤謬や脫漏の、可なりあることゝ、京阪に一寸、觸れてはゐるものゝ、そのすべてに涉つて、疎にして要を得てゐないこと等である。

いづれ、それ等の誤謬や脫漏を正した詳細なものは、拙稿「助六年代記」によつて、世に公にする考へでゐるが（とにかく確な資料に依つたことに於て、信頼して貰へることだけは自負してもよいかと思ふてゐる）こゝには、



天保元年三月大阪初演役割番付

取敢へず、幸四郎、勘彌等によつて、二月の中座に上演中の折りから、それ等の名編に漏れた、京阪に於ける助六興行年表を、やゝ詳細に記して見度いと思ふ。

只一言豫めお斷りして置きたいことは、紙數の關係上、簡單な解説より書けないことゝ、明治の中頃までに止めて以後を略したこと等である。それ等は、いづれ拙稿「助六年代記」について御一讀を願へば幸甚である。

（初演）

○天保元年三月八日（三の替り）大阪　角の芝居　座本　中村額之助

前狂言「假名手本忠臣藏」（大序より十一段目迄）

切狂言「助六由縁江戸櫻」新吉原の段

鬼王道三郎　市川團藏（役名のみ）
工藤左衛門　片岡仁左衛門
やり手お辰　市川宗十郎
けいせい卷篠　嵐三右衛門
けいせい卷絹　中村花曉
けいせい卷波　中村三光
龍頭ノ金　中村梅助
そばや福山ノ勝　市川瀧十郎（後年三代目鰕十郎と改名）
花川戸助六　市川白猿（七代目團十郎の初度上り、一時的改名）
髭の意休　松本幸四郎

三浦屋十三　片岡島丸
けいせい卷浦　瀬川路之助
地廻り六藏　中村東藏
朝顔仙平　嵐舍丸
貫べら門兵衛　中村歌七
曾我母万戸　中山文七
傾城白玉　嵐富三郎（中程より病氣にて、路之助代り役をする）
傾城揚卷　中村松江（後年二代目富十郎と改名）
白酒賣新兵衛　中村歌右衛門
長哥　湖出市十郎
つゝみ哥　三弦田中卯三郎
長哥　富士田藤藏　同　杵谷嘉吉
同　中村常吉　同　中村金五郎
同　中村宇七　同　杵谷龜三郎
狂言補助　金澤龍玉　狂言作者　澤嵐納老
狂言作者　福森吉助
狂言作者　金澤一洗

この時七代目團十郎は初上りの御名殘(浪花の)狂言として演じたもので、又元祖團十郎慶安四年以來、當年迄凡そ百二十歳の壽といふ意もあつたのである。狂言の立方は此度の中座と同じで、顔揃ひの忠臣藏であるのと、京阪では初めての上演といふので大入續きであつた。

「役者大福帳」中村松江の條に「花道より酒に醉ふての出

天保元年三月大阪初演繪番付

新造をつれ見事〳〵、意休との出合はよし。奥座敷にて助六との出合、口舌の間も申分はないぞ〳〵。」又、中村歌右衛門の條に「白酒賣新兵衛役、珍らしき狂言なり、此のやうな役も又めづらしい市川松本御兩人への御勤め、大はりこみ御苦勞〳〵打つゞいての大入はお手柄〳〵」とある。

（二度目）

○弘化三年正月十三日（二の替り）大阪　角の芝居　座本　市川猿松

前狂言「花雪歌清水」　秀吟五葉

嵐吉三郎

御目得狂言「熊坂物見松」宿屋の段

後狂言「一谷嫩軍記」　裏表四段
切狂言「助六由縁江戸櫻」　盛一株

白酒賣　新兵衛　市川鰕十郎
髭の伊久　嵐吉三郎（江戸歸り、新參）
近江屋久三　澤村源之助（宮川清十郎改名）
貫べら門兵衛　嵐冠十郎
けいせい卷里　嵐雛助
母万戸　中山文七
けいせい揚卷　中村歌六
福山の善太　嵐璃珏
けいせい卷の戸　市川壽美之丞
野ざらし五助　市川簑助
極樂十三　中村富助
ゆかんば久五郎　市川三藏
腕の喜三郎　中山美男
花車おたつ　中村桂車
ゑびやこの十　市川猿藏
朝顔仙平　中山文五郎
けいせい白玉　中村巴丈
花川戸助六　市川海老藏
長哥湖出市三郎

狂言作者　嶺琴舍菊種
松鱸亭助

三弦江戸佐々木市藏
三弦岩崎音次郎

この時後狂言が海老藏の工夫に成る「六彌太物語」の書き下しで、佐々木市藏調の獨吟「流しの枝」は「由縁江戸櫻」と共に市中に流行した。吉三郎の江戸歸りや、「助六」の役々が塡つて大出來の處から、四十餘日の大入大當りであつた。殊に歌六の揚卷が好評であつた。（京、初演）

○嘉永七年二月（二の替り）　京　四條北側芝居
（安政元年）　名代　龜谷糸之亟　早雲長太夫

前狂言「けいせい英双紙」全部五册
次狂言「敵討つゞれの錦」卷物三本
後狂言「增補天網島」河庄の段
大切「助六所縁江戸櫻」仲ノ町の段

白酒賣　新兵衛　中村文七
けいせい揚卷　三桝稻丸
母万江　嵐璃登
かんべら門兵衛　生島寛右衛門
そばや善太　市川白藏
朝顔仙平　中村歌四郎
けいせい白玉　片岡愛之助
髭の伊久　嵐冠十郎
花川戸助六　市川鰕十郎
長哥花房常三郎
三弦小紅屋音右衛門
長哥富士田藤藏

嘉永七年京初演配り繪面番付

狂言作者　額琴八十助
　　玉屋玉助
　　松鱸亭助

「役者正札附」市川鰕十郎の條に「助六師匠よりゆづりの狂言ゆゑ、別に評する所は御座りませぬ、大出來〳〵」又三桝稻丸の條に「揚巻きれいな事で御座りました」次に嵐冠十郎の條には「髭の伊久役、衣裳立派にて仕内申分はないが、どうしたものか不評に御座りました」とある。（三度目、一世一代）

○安政四年八月（盆替り）　大阪　角の芝居　座本　嵐和三橘

八百や　半兵衛
鐘馗　半兵衛
稻の谷　半兵衛

櫻紅葉近江八景　造物八段

太綱　平記目　大塔宮曦鎧　三段目の切

市川海老藏　當狂言一世一代　助六由縁江戸櫻　新吉原の段

（顔揃への役にて、中頃から病氣になり、中村仲助代り役をする）

京の次郎　市川鰕十郎
白酒屋　新兵衛　實川延三郎

安政四年八月海老藏一生一代の配り繪面番付

福山善太　市川新升（海老藏の三男にて名前市川高麗藏）
朝顔仙平　中山文五郎
ゑびざこノ十　市川壽藏
花川戸助六　市川海老藏
中の丁湊屋清八　市川幸藏
けいせい卷芝　中山一德
新造卷絹　尾上當朝
けいせい卷篠　中村かほよ
けいせい揚卷　嵐璃寛
女房月小夜　藤川友吉
男藝者荻江里八　嵐和三郎
やり手お辰　生島寛右衛門
貫ぺら門兵衛　淺尾奥山
けいせい白玉　中村大吉
髭の伊久三桝大五郎
長唄玉村芝樂
三弦小紅屋音吉
同杵屋乙吉
同桝屋他七
狂言作者清水賞七

「役者初渡橋」三桝大五郎の條に「髭の伊久花道よりの出衣裳立派にて別て大兵ゆゑ、見榮へが御座りました、それよりかへし部屋の段さしたることなし、しかし伊久役あまりさへ〳〵しないがお役で御座ります。」又、嵐璃寛の條に「けいせい揚卷花道より酒に醉ひながら出、衣裳殊の外立派にて先づ近年此位の揚卷は御座りませぬ。……後、大五郎丈伊久との出合、全盛はかくあらんと存じました。……大舞臺ノ〳〵」次に市川海老藏の條には「花川戸助六、先年お勤めの時分とは余程御年功ゆゑ、いかゞと思ひの外、花道よりの出若々と見へました。何分狂言は市川流に限り別にこゝぞといふ所も御座りませねど立者衆顔揃ひにて、先づ助六の一世一代と云ふ花やかなことで御座りました。先づ當時此位の助六を見る事は出來ませぬ。それゆゑ芝居大入は全く白猿丈の御手柄〳〵」とある。

（四度目）

○明治十二年十一月（顔見世）大阪　中の芝居　座本　嵐璃橘子

高山檢校か遺恨の盤面　嵯峨嶼猫魔租史　校合七冊
伊東莊太か誠忠の龜盤　強力優婦美男　和田合戰女舞鶴　三の口切
御好みに付　助六由緣江戸櫻　新吉原の段

花川戸助六　嵐橘三郎
地廻り吉助　坂東橘三郎
同櫨次　市川小傳治
仲居お橘　嵐璃幸

鬼王團三郎　市川荒太郎
けりせい白玉　中村梅太郎
やい手お辰　中村芝松
鰕ざこ壽藏　中村嘉十
曾我万江　市川額十郎
白洒賣　新兵衛　坂東太郎
けりせい揚巻　三桝源之助
そばや福山文七　中村珊瑚郎
新造巻筆　藤川花友
新造巻皮　片岡秀丸
朝顔仙平　嵐佐十郎
かんべら門兵衛　姉川仲藏
髭の意休　市川荒五郎
長哥玉　村芝樂
三弦　坂東小伊三
狂言作者　近松時助
狂言作者　奈河三津助

この時の「俳優評判記」によると、嵐橘三郎の助六が中評で、市川荒五郎の意休が好評であつた。

この時の値段附と、此度の中座の値段附とを比べて見るのも無意味でないと思ふので、當時のを左に記しておく。

東西　桟敷壹間ニ付金　込　貳圓貳拾錢
上　塲　壹間ニ付金　込　七拾八錢
東西出孫　壹間ニ付金　込　五拾五錢
東塲不殘　壹間ニ付金　込
初日半値段

（五、二　七）

京阪に於ける「切られ與三」の狂言【つゞき】

秋葉芳美

かくしてまた八代目團十郎の二度目の上阪の噂もない時分ではあつたが、一足先へ失敬してしまつたかたちになつた。だが、この狂言は、この八月に八代目の上阪の御目見得狂言として（尤も八代目は例の自殺で、弟の猿藏が代つて勤めたが）本格の「切られ與三」の狂言を中の芝居で上演してからは、この孫店のやうな改作よりも、本店の「與

話情浮名横櫛」が後々まで行はれるやうになつて、孫店並みの「與話情浮名妻櫛」はこの一回（但し京都の松原芝居でもこの十月にやはり、一足、先に初演したので、嚴格に云へば二回）だけで滅んでしまつた。

【註】鼠藝　この語は橘屋與物といふ人の日記の中に——鼠璃珠の藝を評した條に——見えたもので、一寸おかしな詞だが、鼠の藝といふのではなく、體軀が小柄であつて、しかも何役でも他優に後れをとらず、すばしこくカチ〳〵と小きようにやつてのけるといふ程の意で、つまり種々なものを手がける事と、その藝風なり、藝格等が、何んとなく鼠に似てゐるといふ程の意味なのである。

猿藏の「與三」

次が嘉永七年八月中の芝居で、市川猿藏が勤めた時である。これは誰でも知つてゐるやうに、始め八代目が二度目の上阪御目見得狂言として、彼れの當り藝である「兒雷也」と「切られ與三」の二狂言を選んだものであつた。處が稽古までしたのであつたが、いよ〳〵六日初日といふ曉かけて、例の自殺をしたので、弟の猿藏が代つて勤めたものである。そのために初日は十三日に延びて、八代目の追善興行のやうになつてしまつたのである。狂言はその儘で、前が「兒雷也豪傑譚話」（合卷五册）で、切がお富與三郎、月下の奇緣と割書して、名題は江戸と同じく「與話情浮名横櫛」（御好三枚）であつた。ほゞ江戸の原作通りを、木更津汐干の場から、源氏店の場まで三幕上場したのであつた

作者連名は金史朗、玉屋玉助等で、主なる役割は

赤間源左衛門　市川團藏
金神蝶吉　白藏改
はなし家新生　市川九藏（評判記には金神長五郎とあり）
こうもりの安　市川黑猿
職方金五郎　坂東秀調
山蔭平馬　中村桂車
黑砂團平　市川眼八
雇かゝアおとら　市川三藏
海松杭の松　中山文五郎
手代藤八　尾上梅幸
横櫛のお富　市川猿藏
伊豆屋與三郎　市川猿藏
切られの與三
大番頭多左衛門　市川海老藏

等であつた。八代目の持役を猿藏が代つたゝめに、猿藏の持役、はなし家新生を九藏が勤めたのである。猿藏の與三は初役ではあつたが江戸での初演に（この時與五郎役を勤めてゐた）兄貴の仕草を、よく知つてゐたものと見えて、案外の出來だと言はれた。この時の評判を「役者正札附」によつて記せば

喜さらづ沖汐干の段、花道よりの出、着附萬端大家の若旦那と見にました。梅幸丈役お富と見初の幕切迄申分なし。併し見初の間などくひたらいで殘念〳〵、八代目で見たら嘸ぞよからふとの評で御座

りました。内の段にて、九藏丈新生の手引にてお富とぬれの間よく赤間に見付けられ、大勢の悪者になぶり殺しに合るゝ間、めつそうすごい事で御座りました。作り萬端無類の評で御座りました。次ぎ妾宅場、黒猿丈こうもりの安と同道にて無心に來かゝり思はずお富と顔見合せ、いろ〳〵といひぐさの上、せりふ「此の與三郎を見忘れはせまいネイ」と手拭を取られての見に、八代目其のまゝじやと申しました、大當り〳〵。額イの疵などの拵へ、鬘の工合、實に感心〳〵。是れは定めて八代目のお好みと見にます。後、海老藏丈役多左衛門に金子をもらひ歸らるゝ迄、別に評する所も御座りません。先、當時人氣のよい狂言ゆゑ大評判で御座りました。中〳〵御若年に似合はぬ、よくこなされました。

又尾上梅幸の横櫛お富役は

喜さら津汐干の段、拵へ江戸風の年増作りよく、後、與三郎と見初の間、味ひ物で御座りました。去春頃後にて大吉丈此の役をお勤なれど、又々格別な違ひで御座りました。別て江戸狂言と言ひ、なまりとイキを見せるが眼目ゆゑ、一統悦びました。次ぎ、内の段にて九藏丈新生が手引にて與三郎に合ひ、ぬれの間、ぽいやりとしてよふ御座りました。しかし猿藏丈が若輩過ぎるゆゑ、どふかふけて見にました、丈けが殘念〳〵。それより赤間、海松杭に見付けられ其の儘、逃げ出し、文五郎丈松との立廻りより海へ飛込む迄申分なし後、海老藏丈多左衛門に助けらるゝ迄評よく、次、妾宅場湯戻りの拵へにて花道よりの出、きれい〳〵。それより本舞台にて鏡台に向ひ、文五郎丈役藤八を相手に、化粧しらるゝ間、あざやかなことで御座りました。それより與三郎、黒猿丈こうもり安と同道にて無心に來り、いろ〳〵無體を云ひかけるを落付き、顔にて相手に成つてゐらるゝ間、感心な物で御座ります。後、與三郎と顔見合せ惚りの所、海老藏大番頭多左衛門にて右の樣子、立聞きして相方をなだめ金子をあたへ歸さるゝ間、どうか江戸狂言にてお富ゆゑに與三郎の數ヶ所の疵と言ひ、命替りの難儀に合ひし與三郎ゆゑ、今少し、お富情がうすふ御座りました、前湯戻りにて本舞台にて、もちよと與三郎の達者、死なれたか。捨てせりふがなくてはお富に情合うすくどふか狂言の算用が合はぬやうに思ひます、しかし仕内に於いては申分なし。すべて上方とは違ひ、小道具萬端拵は、よくきとうた物で御座ります。二重より平舞臺へ箱火鉢をおろしあるゆゑ、與三郎多左衛門いろ〳〵引込の間、莫ばなゝどをこしらへゐらるゝ間、感心な物、一通りにては梅幸丈てれた役廻りなれど、何角取廻りよく狂言のすか(隙)ぬ所はかんしん〳〵。

とある如く、梅幸のお富は、確に猿藏の若輩な與三を相手にしては、ふけても見えたらうし、定めてやりにくかつたらうと思ふ。又大阪の見物の八代目の與三で見られなかつたことを、如何にも殘念に思つたことであらう、しかし狂言は、前の璃玨や大吉の狂言とは、比べにもならぬ程よいものである。八代目の追善興行といふ意味もあつたので大評判大當りであつた。そうして、これが京阪に於ける「浮名横櫛」の——本格の——初演であつた。

◇正誤　前號七頁ありや娘はあいや▲同頁おとみの後名は役名▲相島小六は桐島

文樂座の怪しい記念出版

木谷蓬吟氏に續いて問ふ

石割松太郎

わたくしは前號において、文樂座が新築復活芽出度門出を記念せんがために、出版された木谷蓬吟氏著の「文樂今昔譚」について、著者のこの著を爲した態度について、學究者のあるまじき不埒を指摘して問ふところがあつた更らに細說に亘つて問はんとして一讀するに及んで、益々愛想が盡きた杜撰といはうか、何といはう？　私はその言葉を知らない程誤謬と獨斷と疎漏とが續出して應接に遑がない。

◇

この蓬吟氏の著に、松竹の白井松次郎、大谷竹次郎兩氏は、卷頭に名を連ねて、

「その豐富なる識見に據る內容は、もつて斯道後世に貴重なる文獻を爲すこと、思考いたします。」

と言つてゐる文樂座の記念出版である人は、恐らくこれを無條件に信じ、「後世貴重なる文獻」となるであらう。御尤もだ。私はこの誤謬だらけの「文樂今昔譚」が「後世貴重なる文獻」となる事を虞る、餘りに、敢て再び、著者木谷氏の答へを聽かうとして、茲に筆を執るのである。

◇

この著者の態度の不純は、この著に添へたる「文樂座興行年表」と、音樂學校編の「邦樂年表」とを比較して前輯に私は問ふところがあつたが、更らに詳細にこの書の年表を點檢調査するに及んで、殆んど「邦樂年表」の內から、文樂座の興行と目すべきものを、謄寫したに止まるといふ證左が歷然として擧つて來たことを、私は著者の爲めに、否學界のために悲しむものだ。私は前號においてこれを「剽窃」とはいはぬが」と私の筆を遠慮しておいたが、今日私は寧ろ音樂學校編の年表の拔書であることを報告せねばならぬことを悲しむものだ。

◇

實例を以ていふと、音樂學校の年表に誤れるのをそのまゝ踏襲して、木谷氏が誤つてゐるのは何を物語つてゐるか。音樂學校のに脫漏してゐるのは、木谷氏のにも脫漏してゐる。こは敷寫しにあらずして何ぞや。——例へば天保八年十一月七日の「伽藍先代萩」その他の興行を記して居るが、これは事實は十二月二日の興行である。これを

音樂學校の年表は誤つてゐる。その誤りをそのまゝ踏襲してゐる。或は一ケ月位の誤りは「誤りを踏襲した」のでなくて、單なる誤りだらうといふ辯護說があるかも知れぬが、こんな例が外にもあるのは何う辯護するか、いつも同じ誤りを偶然に重ぬるものだらうか今一つこの天保八年の興行に限つてさうはいへない大きな理由がある。木谷氏も本文において記してゐる如く、これは例の說教讃語座といふものゝ公事沙汰があつて、文樂座は永らく休座した。その曉に勝公事を以て再開した文樂座としては記念すべき一つの重い興行であつたのだ。忘れようとして忘れられない百萬塔のやうなこの興行の月日は、只の興行の月日とは事が異ふ。この興行の月日をしも他人の編著の誤りそのまゝを踏襲して顧みないことにまづ私は、不審を打つのだ。

◇

こんな事の例はいくつもある。そして又安政三年十月興行及び翌年の正月には三代清七が死んでゐるのが、生きてゐる事になつてゐる。これも清七が死んで、初代團平が初めて長門太夫の合三味線となつたといふ忘れられない興行だが平氣で誤謬を重ねてゐる。

◇

まだ〳〵ある。が、こんな誤りを正してゐると「月刊」の紙がこれのみに盡きてしまひさうだから、まづこれだけを實例とし。他は必要に應じて幾何でも記してみせよう。

◇

更らにこの記念出版の不深切なる一例は、第一頁の檜下の看板は、まづ說明がなくとも解るものとして、淨るり八功神の寫眞が何等の說明もなく投込まれてゐる。この八功神は說明がなくばまづ解らぬ代物だ。著者は何と思ふ不深切の譏は免れまい。

◇

本文に入つて、初代竹本義太夫が天狗鼻の百姓であつたから、素人淨るりを「天狗」と稱するに至つたといふ事が書いてある。尤も著者の想像、思付きのやうな筆付で書いてあるが、これを讀んで實は私は、「文樂今昔譚」を机上に擲つたのだが、再び拾つて讀み續けたのだ。が、實はかういふ風に一頁一頁に見て行くと獨斷と誤謬とが各頁にある。九頁の「義太夫の靈夢」などいふ俗說巷談にも恥しいものが採用されてゐる。三味線の起原にも說かれる俗說だ。嚴島神社になつたり、淺草觀音堂になつたりする靈夢だ。此種の許多ある藝的傳說を、かく眞面目に採用してあるのだから、略この書の價値が大抵の者でも判斷が付かうと思ふ。嘸かし松竹の所謂「後世に貴重なる文獻を殘す」ことだらうと嗤はざるをえない

◇

こゝまで書いてもう、私は馬鹿〳〵しくなつたから、目をつぶつて木谷氏のこの「文樂今昔譚」を聞いてみる。

そしてその見開きの二頁にどんな事が書いてあるかを見よう——といふ一舉に總てを律するといふ方法を採つてみる。

◇

五〇頁が開かれた。この頁には因講の起原が書いてあるが、どうも服しかぬる。木谷氏は竹田出雲のいふ「廿日會」と因講とを結付けてゐるが、これは初めから性質の異なる二つの會合だ寛政九年三月に因講の事が記錄に出てゐる事は、木谷氏の說く如くだが、この記錄を按じてみると、流祖義太夫の伊勢講から、同業組合に發達したのが因講で、一派の師匠が藝道のための會合であつた二十日會とは全然異るものであることは、木谷氏のいふ寛政三年の記錄を見てハッキリと解る。私が因講の歷史を探求したのと、木谷氏のと同じ材料を探しえて、その言ふところの各自に異つてゐるのに、一寸興味を引く。私は因講の歷史と、この天保度の說經讃語座の一件は、昨年の夏「演藝畫報」に認めた。そして近く春陽堂からこれらを收錄して「人形芝居雜話」として出版さるゝ事となつてゐるから私が私の出版物を廣告するやうでをかしいが、興味を持たるゝ方は、木谷氏の說と合せ讀んでほしい。と私は立合演說を望んでおく。

◇

だが、それ等は各自の議論で、何れが雌雄か解らぬといふ人あらば、動かす事の出來ぬ事實の問題を今一つ私は此頁の前後から指摘してみよう。木谷蓬吟氏は、文樂座といふ座名の出來たのは「明治四年九月からだ」(四九頁)といつてゐるが、是れも誤り、文樂座の稱號は明治五年正月、文樂座が松島へ引移し新築をした時からだ。これは何も文樂座に限らぬ、道頓堀でも芝居に「座」名が付いたのが、總てこの明治五年正月だ。明治政府がいろ〳〵な世上の萬般大小の事に亘つて改革を斷行したのが、この明治五年である。

◇

再び冥目して「今昔譚」を開くと、十八頁と十九頁が見開きになる寓目すると奇怪なる事がある。

その頃(元祿期)の消息に通じてゐた西澤一鳳(近松淨るり本の出版元で又豐竹座の作者)の著はした「今昔操年代記」云々……

とあつて、「操年代記」の引用がしてゐる。

が、一鳳ぢや年代が違ふ、西澤一鳳は享和に生れ化政度にかけての人だ。その一鳳が「元祿頃の消息に通じてゐる」も不しぎ。恐らくこれは一風の誤植か、作者の思誤りであらう。——と百歩を讓つて讀んでも不思議な事がある。木谷氏の一鳳(風)の註によると近松淨るり本の出版元だとあるが、こは近松專門家の木谷氏とも思へぬ誤りだ。私の知れる處によると西澤一風にしろ一鳳にしろ、近松の淨るりを一册

も（と斷言してもいゝだらう）出版してゐない。近松淨るり本は殆んど盡くが、正本屋九兵衛即ち京の山本九兵衛で、その出店である「大阪高麗橋一丁目山本九右衛門版」と本支店の合版になつてゐる。尤も山本九兵衛のみとはいはぬ。例へば正本屋仁兵衛その他もあるが、殆んどが、正本屋九兵衛版である事は、近松を原本で、多少とも味つたものゝ知らぬ筈のない事だ。それを木谷氏が豐竹座の作者であり、豐竹座の正本屋の西澤一風即ち正本屋九左衛門が近松淨るり本の出版元だとわざ〳〵註釋をしてゐるのだから、實は呆れ返へつて物が言へない。多少とも淨るりに關心を持ち「操年代記」でも繙かうといふものは、誰れでも知つてゐるこの事を平氣で誤つてゐる。私は單なる誤りを責めないで、胡麻化しから出た誤りと其不眞面目な態度を責めるのだと度々いつたが、人の飜刻した誤りだらけの活字本で近松を讀んだり、明治初年の惡活字本の近松淨るりを引ちぎつて「大近松全集」を編纂する場合には、近松の出版元は分らないが、若干の近松の原本を取扱ふと、こんな誤りは斷じて出來ない。したくとも出來ない誤りを木谷氏はやつてゐる。讀者はこれを何と見るか。これが近松の專門家だから、——又それで世間が通用するのだから、世を賊する事の多い事を慮れ。私は茲に斯くはその「不都合なる誤り」を指摘しておくのである

◇

こんな風に、所選ばず冥目して引あけて、これだ。私はこの一册のどこを開いても、これだけの誤りを指摘してみせる。實は一讀して私の所藏の「文樂今昔譚」は朱筆で眞赤になつた。「三味線彈のかず〳〵」の條に出てゐる初代團平の逸事等は無嶄な有樣だ。私は再び冥目して明けてみる勇氣もないほど、この蓬吟氏の近著に對して、殆んで盡くについて申し述べたい誤りと、獨斷と資料使用の不妥當が目に付くのだから、これ以上書くことの愚を斷言してこゝに私の筆を打切る。これでも木谷蓬吟氏は、この著をこのまゝで、世間に恥とともに晒しておく勇氣があるか否かを、改めて聽いておきたい。

◇

茲において、私は注文したい。——それはこの著を發行した「道頓堀」編輯部は、著者蓬吟氏に乞うて、今後每號の「道頓堀」にこの册子の誤りを蓬吟氏自らが正しておくのが、著者の世間に對する義務ではあるまいか。又發行所としての義務でもあるまいか。物は相談だが、この實行が木谷氏に出來るかどうかを私は聽き、且つ注文するのだ。

又卷頭に「斯道後世に貴重なる文獻を爲すこと、思考」したといふ、白井松次郎、大谷竹次郎の兩氏は、こんな册子を委囑して、斯道のために責任を感じないか。どうだと私は問ひたい。

私は私の愛する人形淨るりの最後の本城である新しい文樂座が、こんな淺ましい册子を以てその新築を記念された事を遺憾に思ひ「文樂座」の恥辱であり、引いては「大阪」の恥晒しだと斷言する。著者蓬吟氏を初め關係諸氏以て如何とする。

文樂座の「國性爺」

石割松太郎

更生した文樂座の如月狂言のうちに久々の「國性爺」が出てゐる。前興行の「鬼界ヶ島」といひ、今度の「國性爺」といひ、多少とも狂言の選擇の範圍が擴められた事は、よい事だ。が、掛合が三つまで出て、やう〳〵に太夫三味線のハケ場を無理に苦面をして使つてゐるが、こんな方法が果してよい事だらうか、どうだらうか。興行政策と引離して文樂座の當事者は一度よく考へてみる事だと思ふ。「興行」を爲しつゝ、若手の養成、後進の試練を爲さしむる事相當の努力を要しよう、そして昔とは時間が短縮されねばならぬのだから、苦心を要する事勿論だが、掛合で太夫三味線をやうやくにハケしてその日を送る事は、偸安の道である。他に施設を講ぜずして、これで將來をどうするか。小屋見物と新しい組見で、いつまでこの調子を續けようとするのか。私は尙一ケ月ぢつと見てゐよう

◇

三狂言の掛合でやう〳〵文樂座の人間をハケして、尙且つ五六十人の人が休んでゐるといふ話である。そして今日までは、毎日替りの出演者にも、全給料を支拂つてゐたのが、この四ッ橋の文樂座になつてからは、「日割勘定」であるといふのが、太夫三味線の下ッ端の生活である。それに對しての批評は今はいふまい。何故ならば、新築、開場と重なつてゐるから、少し落つく暇をまつて松竹の行はんとする「將來の文樂座」のための方針を見ようがためである。このまゝではその月の興行は、その月暮しに立つていけようが、決してこんな狂言の立て方は百年の長計ではないのである。

◇

前「國性爺」の開幕が「仙檀女の道行」だが、半ばから開いたので、全体としての批評は出來ないが、「道行」らしくない「道行」を聽かされた。シテが駒太夫、ワキが貴鳳太夫で、何をいつてゐるのか文句さへも分らない。三味線は叶が心であつたが、練習が足らぬといふのか、床が不統一といはうか、騷音を聽くばかりの「道行」は、善惡を超えて「道行」らしからぬ「道行」は考へものだワキの貴鳳の如き音聲が、道行らしくない道行をいよ〳〵道行らしくなくしてゐる。從つて人形も評なし。

◇

「樓門」は鍛に新左。いつもの鍛太夫よりは謹んで（？）我流（？）が出ないで、シックリとしてゐた。が、錦祥

女にそれらしい身分の要意が缺けてゐるから、舞台模樣と淨るりとが肌々な感じを與へてゐる。三味線の新左衛門十分に鍵を助けて、リードして行く。

◇

人形では紋十郎の錦祥女、なか〳〵によく遣つた。文五郎の母も、この人の割に淡々として片づけていつた。

◇

獅子ケ城は、津太夫と友次郎。これをこそ今度の呼物と私は期待したが、案外。尤もこの淨るりの有名なのは、他に理由のあつての事で、古來いろいろな名譽の藝談を先名人達は殘してゐるが、これだけの三段目、歌舞伎に移しても、江戸では市川家の荒事となり上方でも歌舞伎の故實を殘してゐるが津太夫の獅子ケ城はアッケなさすぎる明快といへば明快だが、聽者を引つける締結りがない。ダラリ〳〵と同じ足どりで押通して、終りになり聽く者がホッとするなどは、津太夫友次郎の名譽でもあるまい。呼物にと存じて、思つた獅子ケ城に力負けをして大きに失望した。もつと〳〵三段目らしい、荒事らしい、怪奇な、思切つたグロテスクな趣を淨るりに要求したものを。

◇

人形では榮三の甘輝、堂々としてはゐるが、錦祥女に對する情合が出ないのはどういふものか。玉松の和藤内がセリ上りで、本松明を持つて出たのには少し呆れる。人形芝居にこの本松明を使はうといふ了簡方が間違つてゐるドス黑い烟を濛々とさした舞臺には情けなくなつた。道頓堀の歌舞伎ですら我童の和藤内が、緋綿の松明、この繪畫美が、歌舞伎なり、人形の生命だ。玉松は自ら人形の生命を蝕ばまうとしてゐるのは不心得である。この寫實脈は何んとかして人形舞臺から追拂ひたいものだ。この舞臺がグルリと廻つて甘輝の館になると、あの大きな煙管を甘輝が悠然として使つてゐるのだ。舞臺の調和からしても、統一からしても本松明など使へたものぢやない。私はだから、人形の舞臺の統一的の監督の必要を唱へるのである。——ホントに權力を持たした監督者。或は座頭の統一にまつかゞ、人形芝居のためである榮三の使ふ甘輝の大きな煙管、梅王の三本立刀、この意表外の繪畫美に人形芝居の價値のある事を忘れてゐる人形遣ひの頭は一洗すべきである。人形の舞臺における寫實風は、人間の生身に譬ふると結核菌のやうなものだ。最も恐るべき病弊だといふ事を自覺せねばなるまい。

◇

次が「勸進帳」——掛合で大隅の辨慶和泉の富樫、相生の義經などであつたかういふ風な長唄から取つたもの、又前興行の「柱立萬歲」の如く常磐津からとつたものは、何んとしても本家がいゝ、それは固よりその筈で、そのモノに作つたればこそピタリと適つてゐる

長唄にいゝから常磐津でいゝからといつて必ずしも淨るりでいゝ筈がない。却つて悪いのが當り前だ。この「勸進帳」も長唄ほどの面白味がない。が、この前に「勸進帳」が出た時の節付は、もつと〳〵長唄についてゐたがために今度よりも更らに詰らなかつた。今度のは名人團平の節付である。流石に長唄を離れ切つた所がある。卽ち義太夫になり切つてゐる。然しそれでも本家には勝てないのだ。不世出な天才と呼ばれた初代團平ほどの名手にして、尙且つ庇をかりて母家をとれなかつた。これを見ても却々今の世に淨るりの新作の不可能なる事を證據立てゝゐると思ふがいかに。今一つは團平が作者の勝れたのを得れば或は彼の一生に「壷坂」のやうなもの以外にホントに立派な節付を殘したかも知れないが、それがない。この勸進帳の所々の改作の如きにも相當に文章の蕪雜なのが耳に立つ。

◇

が、この作をこのまゝに請容れて大隅は相當によく語つた。問答の條が最も出色。和泉の富樫一生懸命だつたが辭の腰が折れる。三味線の道八、こんなものになると手一杯に面白く聽かせる。

◇

人形では、今度の興行の太夫、三味線、人形を打つて引くるめてこの榮三の辨慶が一番だ。私はこの人の一ノ谷の熊谷に一度感心したが、今度の辨慶は工夫において、新しき手法において實によく遣つた。只引込みに扇をサッと開いて使ひながらの引込みは辨慶の今まで全曲の力を茲で拔けてしまふのををしいと思つた。人形淨るりの歷史を按ずると、太夫に名手がなくなると淨るりで人心を引付けられない、この時代にいつも眼に訴ふる人形が頭擡して、舞臺に床が引摺られてゐる。按ふにこの二三年來、この傾向が我が文樂座にハッキリと見え出した。前興行における榮三文五郎の「三番叟」今度のこの「辨慶」などはその一つの現はれであると見ていゝ。今後どんな形をとるか知らないが、恐らくこの風潮が助長され、人形遍重の時代がもつとハッキリと將來するだらう。太夫、三味線、人形は三輪車の車の如く、同じ一線上に立たねばならぬのが原則だが、こは何とも出來ぬ「時の力」といはうか。三業各業において枝の陵遲の致すところ。昔の歷史をそのまゝ同じ徑路を辿つてゐることを私は今度の榮三の「辨慶」にハッキリと見た。

◇

紋十郎の義經も役柄をよく知つて遣つた。玉治郎の富樫に思慮が缺けて見える。四天王に氣がなくて、松羽目模樣がとれて安宅の濱となつてから、太夫の辭と人形の四天王とがピタリと合はないで、混雜してゐるのはちと見苦しい。

◇

次が「合邦」俊德丸と淺香姫の出の端場を鏡太夫、綱右衛門の絃で語る。取立て、申すほどの場でもなし。この切を古靱太夫の筈が病氣で缺勤。つばめ太夫の代役であつた。前興行の掛合の伊左衛門がなつてゐなかつたつばめ太夫だが、師匠の代りとて、氣一杯に緊張して語つた。立派な出來だ。若いだけに後半がやゝ亂れかゝる急込んで來る餘裕に乏しくなるのは當り前で、それが出來れば近い將來の紋下だ。——がさうはいかぬ。今が修業中のこの人としてこれだけの淨るりをよく語つた。細節は省くが、合邦も玉手もよく語つた事を賞しても溢美ではない。玉手の手負になつてからは混亂に陷るのは巧者のやうでも若い。難をいへば師匠古靱そつくりだといふのが難といへば難だらうが、この人の年輩で、まだ自分の淨るりになつてゐない處にこの人の將來がある。碌な淨るりにもならぬ間に、その人の個性が出ればそれこそ行詰り、然らざるところに、この人の洋々たる將來がある。今日の文樂で、最も多い廣い高い將來を期待される隨一はこの人ではあるまいか。師匠そつくりの淨るりを稽古してゐる今のこの人こそ有望なのだ。鶯の巣から巣立ちをする時鳥は鶯ぢやあるまいぢやないかつい曩頃土佐の「合邦」代役に名譽をえた鏡と同じく、つばめも今度の「合邦」は名譽賞に値すべきである。

◇

人形は文五郎の玉手が例の如く面白し。この人今度の役々ではこれが一番阿古屋は俗受け前受けの琴の手に矢鱈に拍手は起るが、玉手の前半が實にいい。この場の扇太郎の淺香姫が、手負の玉手の話を聽く間、所謂「藝を盜む」程度でなく氣を入れて演じてゐるのが眼につく。主演の邪間をせずに氣を入れて舞臺を勤むる扇太郎を再び私は褒めておく。

◇

切は土佐太夫の阿古屋、大隅太夫の重忠その他。掛合もので情味薄し。一体に人形芝居は、舞臺が樂ではお客の興味は殺かれる。淨るりに生氣乏しければ人形も活動しない。「掛合」といふ方法が、太夫をハカす唯一の道ではない。吾等は文樂座の掛合ばかりにもう二タ月で飽き〳〵した。

梅が枝

梅が枝に、吹き亂れたる景色こそ、いとど戀しさますほの浦に、契をこめしも、今は早間の手絶え〳〵に、せめては人の心あらば間の手そよとなりとも水莖の、流れにつるる濱千鳥友呼び焦れつれなきは、深き思ひなるべし間の手なか〳〵に初めより、馴れずば物を思はじ、忘れかねたる涙川。

浪花座の國性爺

——興味を惹いた上方の中堅役者——

石割松太郎

◇中座の大敵を控ゑて、浪花座は、我童、延若、魁車といふ上方中堅俳優で開場した。一番目の「國性爺」は道頓堀に久し振、文樂座と相應じて興味を引く。只私の見物した時は、主役の和藤内の我童が四十度近くの熱を押しての出勤であつたから、これをそのまゝに批判するのは氣の毒だ。にも拘らず紅流しも引込みの六方も初演(?)とは思へぬほど整つてゐた。延若の甘輝を褒める人があるが、一通りで寧ろ錦に祥女對する情合の薄いのが缺點。

◇魁車の錦祥女、抜ける程の唐美人の美しさと水々しさがないので樓門が引立たないが、紅を解いて流すといふせりふに唐扇の緋の房を流がすのやうにしごいてゐるのは紅になぞらへたい科介。長太夫の母渚は抜群の出來。この人久しく檜舞臺から遠ざかつてゐても、少しも臭からず手堅い演出は大出來。

◇「矢の根」は三升。舞臺効の薄いこの素人だからか、白が全く底力なし。實は素人ともいへぬ生半じやくだから見てゐて覺束なくて荒事の骨がはづれる。長三郎の十郎幽靈にならぬところの壷をしつかりと演じた。出るだけの役だが褒めていゝ出來だ。

◇「鬼神の舞」は思付の作、延若にいい出し物だがコクのない新作、ワキの大吉の海老谷源三がよかつた。

◇「釣女」——我童の太郎冠者を魁車急の代役故評は見合はす。長三郎の醜女シツカリと踊つて上出來。地の常磐津文賀太夫連中拙し、ホンの一例をいへば、太郎冠者が釣るところで「當るぞ」の拙さ加減話にならず、カド〳〵の語りどころ節どころにこの曲の要求する輕さがない。踊が一段と榮えぬのは地の拙さが手傳つてゐる。地の拙さは一々にいはぬが、いつでもいへるやうにノオトはとつておいた。

◇紙治の炬燵を延若と魁車で出したのに興味がある。延若の惡い處は、炬燵で聲を出しての歎欲は藥が強い、いい處は、おさんが質物を出してゐる間炬燵に靠れて襦袢の袖口をヂツと嚙んでゐるあたり、鴈治郎のうろ〳〵して羽織を渡さうとするやうなイヤな科よりも立派に藝にしてゐるのを褒める。一体の難は動きすぎる事。おさんは、近松の女房中でもイヤな出過ぎた女、賢しこがりの女に書いてあるその役柄によく適つた鼻先利口の女になつてゐるのが魁車の長所だが小春を請出してから?の條りに哀れが薄い。

◇二番目は一度大分古くお目に當つて洗張り(?)温めのまゝ收つてあつた「櫻をうづむ雪」といふ駄作、今日日の目を見る代物でなし。

駈け足の忠臣藏

——中座の鴈治郎と幸四郎勘彌——

石割松太郎

曾我廼家の初期の作に、四十七分間の忠臣藏といふのがあつたが、今度の中座は大序から茶屋場まで、駈け足で丁度六時間。忠臣藏の通しを見せるにして、こんな演じ方では、丸ッきり歌舞伎を壞してゐる。これが不平の第一

勘彌をわざ〳〵東京から聘んで、何を見せてゐるか。勘彌を見せるならば勘彌らしい物が見たい、その擧に出でないで勘彌は殺されてゐる。これが不平の第二。

◇

それでも今度の中座は大入滿員だといふのは、何の故か。それだけ大阪の俳優に人は飽き〳〵としてゐる。鴈治郎中心の芝居に飽き〳〵としてゐる。物珍らしさの「助六」と勘彌とが、確かに今度の人を呼んでゐる原因だらう。

◇

それでゐて芝居は至極詰らなく面白くない。その原因の一つは、東京と大阪役者の合同で、藝風の違ふ點から大きな破綻のみが目につく事。二つにはコックリと見せてこその「忠臣藏」を駈け足では、役者の藝が皆んな死んでしまふ。カットせずに出せといふ事は、時間の問題でむつかしからう然らば、然るべき段だけを出させて、コクのある舞臺を見せてこその忠臣藏である。こんな水ッぽい忠臣藏をやるなら、曾我廼家の四十七分間に縮めたが面白からう。

◇

大序からこの忠臣藏を面白くなくさせた第一は幸四郎の師直の罪だ。全く歌舞伎を壞して、ダラ〳〵と捨白の多い師直、それで調子の異つた新史劇とでもいはうか、他人の舞臺を考へないあの水に油を入れたメリハリは言語道斷、科介には白にも何一つ採るところのないこの師直では堪らぬ。私はよくも福助が判官で相手にしてゐると思ふ幸四郎の入れ白、捨て白の無法な中にも、鮒士の條で「廊下の大臣柱に鼻を打ち」或は「この小僧」などいふ。且つ贅言が多いからくど〳〵として喧嘩場の舞臺が締らぬ。對手方の判官は、こんな亂暴な師直の捨て白をしかも平話俗調でこれを喋べるのだから溜つたものでないこれをどこまで順柔しく聽いてゐねばならぬ義務があるだらうか。私のいふのは役者の下手上手でなく、

福助のために、こんな師直を中座の舞臺に許した事を奇怪至極だといひたい七ッ目の平石衞門も然り、「何とやらして——によつて」ばかりを重ねてゐる。この時も相手は福助だ。福助のやうな穩順一方な男なればこそすんだ話。私の如きは棧敷から見てゐるだけでも、福助がはがゆくて溜らなかつた。

◇

源之助の顏世、兜改めは我慢もしようが、四ッ目は見てゐられぬ幼減を感ずる。俳優の資本の半ばは肉体だ、源之助の顏世はその半を失つてゐる。それをも辛抱せねばならぬ程源之助の腕に何の採る所があるのか、これも奇怪な幕内情弊の一つだ。

◇

勘彌の若狹之助、大序が感心せなかつたが、松の廊下で見直した。定九郎の姿は錦繪風の風貌をよしとするが、科は、これで勘彌を買つたとすると引合ふまい。例の五十兩の勘定、丸本の勘平の住居から割出して封を切らないのが味噌だといふ松竹の宣傳があつたが、私は採らない。丸本の本文が——この忠臣藏の如き合作の作品を後段の「封のまゝ」位の本文に拘泥して二つ玉の塲の形を忘れてゐるのは、頭のよいといふ噂の勘彌にも似合はぬ屁理窟だ五十兩を財布の中で勘定してこそこの塲の定九郎の形がつく。蚊を右足で叩く條でも、左の足が叩く拍子にグッと崩れたが、悪い形「劇評の劇評」に拔粹した「ペケ」に私は賛成するとともに、繪美の滿點にも賛成だ。千崎彌五郎も一通り。石童は無闇と神經質な檢便、これでは歌舞伎の味がない。これでみると「忠臣藏」で特に勘彌を要した何ものがあつたかしらん。

◇

鴈治郎の由良之助、馳付けはよし、が、判官の耳に小手を翳して、胸を叩いて飛すさるが、業々しくて小刀細工判官が九寸五分を遺品にといふと鴈治郎がチラリと石堂を見るなど、由良之助も石堂も神經の尖つた事、それだけ歌舞伎の世界から離れる。明渡しはよし、提燈の小細工もないが、九寸五分の切尖を包んだ血染の紙を呑んでしまふといふ例の演出は感心しない。花道半ばで、紋服の鷹の羽に不圖心付いて嘆き、氣を變へて引込むといふ演り方は、この塲の如き押出しで見せるのだから、由良之助ではこゝが一番の出來茶屋塲は鮹魚もッット、力彌の出もカット和らか味の由良之助は全部沒。それで茶屋塲がいゝかといふに、おかるにヂヤラ付く條がよくなくて例の駈足

◇

勘平はまづ容色において衰へが見える。源之助の顏世と一對。二つ玉は出ただけのぞんざい。身賣に情愛がなくてサバ〳〵としたものは、年は爭はれぬ。それならば型にいゝところがあるかと思ふとさうでもなし。財布を見較べる條りなどいけぞんざいこの人あた

りが、こんな藝をしてゐては、實際大阪の歌舞伎は益々壞滅だ。源之助のお才と市藏の源六が、藝風が調味せず、勘平と二人士でも肌々だ。こんなそんなで今度の六段目は近年にない惡い。扇雀の力彌が、細い聲を遣はうとしてあの惡い調子が、益々耳立つといふ譯

◇

これでは「忠臣藏」玉なし。この原因の一つは短い時間に演じてしまはうとした罪が責の半を負はねばならぬ。せめて、誰か滿足な優があるかと拾ふと僅かに一人「進物」の箱登羅だけが本役を本藝でやつたばかり。

◇

「助六」は矢張り羽左のものだ〳〵と世間ではいふが、最近の羽左のを歌舞伎座で見、京の南座と今度の中座とで幸四郎を見ると、花道の助六は幸四郎に團扇を揚げる。白をいはすと羽左だ引締つた江戸ッ兒らしい處は羽左にあるが、和事を加味したふくらみは幸四郎にある。福助の揚卷色氣に乏しく、花道にほろ醉ひが一向なくて、素面で生野暮だ。彦三郎の意休——幸四郎が意休に廻はらぬ以上この人の外にないといふのだから、これで忍べとは不自由なものである。並び花魁では押出しは扇一等、せりふは雀一等。

◇

宗家の三升福山のかつぎは、素人らしくて御馳足にならず、口上は小音で下手。この口上がすんでそのまゝ後ろ向下手を向いて「河東節御連中」をいふが、これではその主旨には叶ふまい。一度立つて下手へ座直していはねばなるまい、どうか。勘彌の白酒賣はよかつた、今度勘彌で多方面な腕を見せたが、これだけは無條件で買つてもよからう。純藏の外良賣は若輩で第一に愛嬌がないから舞臺に味もしやしやりもない。その他まづ一通りの出來。これで二時間半は、もうさう〳〵度々出ない狂言だらうから見物も辛抱したのであらうが。それで喧嘩を敎へるくだりをアッサリとしてゐる。これは最も適當なるカットであつた。

◇

切に幸四郎の文屋と勘彌の喜撰、茶汲女がしうか。梅吉喜久太夫社中であつたが、この切になつてホッとして樂々と面白い舞臺を見た。それほどでもない踊なり、清元なりだが、それでもこれが一番面白く引つけられたのは、「忠臣藏」なり「助六」なりの詰らなかつた事を證據立てゝゐる。

【校正の時に】 茲に十行の餘白が出來たから、幸四郎の師直に就いて再說する。——役者の上手下手、出來不出來はさて措いて今度のやうな、型物に不當なる入れせりふ捨てせりふを冗慢に喋つて、對手方を窮地に陷れるやうな、幸四郎のやうな場合に、判官役者が、それに默つて應じてゐねばならぬ義務があるだらうか。惣稽古の時でも或は初日が開いてからでも對手役は理由を付して堂々と拒否すべきが、藝道に對する誠の道だと思ふが、どうだらう。

劇評の評劇

◇本欄が創設されて八閲月必ずしも私の筆の効果とは自惚れないが、近來大阪の諸新聞に、見え透いた詐僞的の松竹の宣傳記事が無くなつた事は、御同慶に堪へない。尚二三紙のノホンな態度は笑ふべしだ。例へばこの二月興行の文樂座の古靱が初日から休んでゐるが、その古靱が出てゐるが如き松竹の通信記事をそのまゝ掲載してる二三紙があつただけであるのは、多少遠慮の氣味が見え出した。

◇又劇評にしても、箸にも棒にも懸らぬ愚文を弄しお茶を濁してゐるのがあるが、これらは芝居が解らず棧敷で眠つてゐる手合で、對内的の劇評だから論外だが、鴈治郎絶讃の面々が、多少ともその筆を謹みつゝあるのは愉快私は腹の底から變ンな微笑がこみ上げてくすぐつたい思ひがするが、それでも會心の事だ。實以てかうなくてはならぬ。例へば大毎の高原氏の如きも、鴈治郎の六ッ目の勘平を「名物に何とやら」と消極的の非難を見せ、大阪日日の「よしあし草」の記者も、「失望させたのは六段目である」と勘平を消極的に鴈治郎の名を示さずにソッと難じてゐるところが可愛い。消極的にしろ、無闇矢鱈に鴈治郎禮讃の聲のない二月の劇評壇を、尤もの事だと思ひ、稍々大阪の新聞の演劇記事にも「反省」の影が見え出した事を喜びたい。

◇この時に頁の少い紙を緊縮してゐる、演藝月刊が徒らに各紙の穴を探すでもあるまい。要は、劇界の權勢に阿る徒を、私は心から憎むのである事をこの際に重ねて宣言し、今月は、「劇評の劇評」を一頁に縮めてしまうた事を自ら喜ぶ。

◇その内で、所論の直反對で面白いのは、朝日の築山半四郎（石田瑠玖盤氏）が、定九郎はペケの一言で盡し、大毎の高原氏が「滿點の繪畫卷」と賛してゐるのが好一對だ。

◇大朝の松本憲逸氏が我童の和藤内を採り、日々は延若の甘輝に團扇を擧げてゐるのも、直反對ぢやないが、見方の違ふ好一對。關西中央の合評で、獅子ケ城のチョボを下手だといつてその例に大隅太夫のは大きかつたといつてゐる。この大隅はどの大隅太夫の事やら、太夫はチョボには出た事はあるまじ。淨るりとチョボと同じ標準の一線上に置いての批評は、牡丹餅と馬の糞とを同列において好ききらひを言ふが如しお話にならぬ。

◇大阪日日で、幸四郎が「島原から吉原へ歸る」といふ忠臣藏は確か祇園町、實錄ものは鐘木町、島原は何處だ〳〵とあはてもの、火事のやうだ。又同じ日日が純藏が白酒賣に絶句するといふが、「助六」にはいろ〳〵な賣立てが多いから御尤も、これも商賣勉强でめでたし〳〵。（石割松太郎記）

と、尋ぬれば、

イヤ、私は當所の者で御ざり升が、私のむすめ二人は義太夫語りで御ざりまして、江戸山の手麴町六丁目にて住居をいたし、やはり染太夫さまの弟子にて竹本秀女妹は此宮と申升が、久敷お江都へ參り藝道修行いたし升れば、當所は生れ故郷の事故、爰の席にて寄淨瑠璃興行の積りを致、先日より私が連てもどり、漸々此節席をはじめませうと存ておりまする所なり。私が宅はツイ此むかう裏で御座ひ升が、娘共が申升事には、兄弟子の實太夫さんが先達て日光山へ參られしからは是非共この邊へ歸りにはお通りに相違なければ、どふぞお目にかゝり度とて毎日まちうけて斗おり升所、昨日當所へ江都から太夫さんが此宿へ入つしやひましたと聞、夫なれば實さんに違ひあるまいから、一寸尋てくれと申升故參りました。

左樣なれば少しも早ふ歸り、此事申て悅ばせませう。

と、懇に挨拶して、親父は宅へ歸りける。

万吉は何となく只壹人悅ぶ體、是外ならず。彼女の妹此宮と江都にて譯ある事なれば、爰にて逢は優曇華の咲華よりも希な事と心には思へ共、實太夫の思案の顏を見て何事も云出さず。實太夫の心中にも万吉此宮の譯ある事はよく知ては居れど中々夫しきの事にあらず。此度の女太夫は我兄弟弟子とは思ひも付ぬ事なれば、當所にて彼女太夫とよせ淨瑠璃を興行して、男太夫の威勢を見せんものと思ひて、出來兼し席を森が關親方を賴み、漸々大半出來る樣なつたる處、其女太夫が我妹弟子とあれば、世の中の義理合にても、我等が後へ引取が順道なれば、是は斯して居る所にあらず、ちつとも早ふ森が關へ立越て此譯を語り、龜が席を變改せねばなるまひと、万吉に此事を咄しをすれば、當人の思はくは、爰にて席を打ざればいづれ先の宿へ往ねばならぬと、只壹筋は若氣の至り。實太夫是を哀れに思へ共儘ならざるが世の有さまと、氣强くも是を見捨、森が關へ立行んとする所へ、彼女二人連にて進物なぞを供の者に持せ入來り、實太夫兎あれ斯あれ座に直り、久しぶりの對面にて長々の咄し事終り、席の事の咄しとなつて、女も當所は故郷の事なれば、いつ迄逗留する共夫には厭ひはあらね共、今興行の積りして御地頭へ願書認差上し事なれば、實太夫を先へ廻して興行させる事もならず、是も又世の義理にせまりて居たりける。

扨も此一條は只々實太夫が後へ引取ば相濟事と一心に思ひ、表向は江都へ心せきのせはしき事を云立、引退く斗の咄しをすれば、女も是を誠とは思はね共、何をいうも願ひ上し事なれば仕ようもようもあらざれ共、實太夫の詞にまかせ、咄しは四

方八方の事斗にして、此夜は彼女の宅にて馳走になる約束して頓て立別れける。

扨夫よりして實太夫は森が關へ立越へ、眞斯々の入譯を語り、賴たる席を變改すれば、關取大にめいわくし、我等が龜を賴みしゆへ、龜は急々初日の積りを仕て、家のそうじにかゝり、辻びらも今認最中なりと、聞ば聞程氣の毒なり。關取は實太夫の云事能々の事と思ひて荒增承知して、龜の席へも斷を告、せめて座敷にても催しいたすべしと心よく別れける。

既に其日も西山にかたむきければ、秀女の方への進物を調へ、万吉園太夫を召連、只壹足向ふ裏尋求めて行ければ、二人の女も父親も希々の珍客とてもてはやし、直樣酒宴とこそはなりにける。扨また彼二人の女は當所の生れなれ共、東にそだちて何某と人も知たる義太夫語り、姿形は人並勝れ、江戸表にて町藝者なれば何となく程もよし。酒宴の時は座持も殊さら、義太夫の太三味せんは取置て、江戸ごまのしやれ彈に此家の門に市をなす。父親は遒年取てもしやれ者の通り者なれば、程よき頃に己が隱居に引込ければ、跡はうは氣の若者共、諷ひつ踊つ夜を更し、明の烏にこゝろ付、男は其儘醉草臥てころりと伏。女はそこらゐ下女に取片附させ、勝手に入て休みける。

扨も、實太夫の三人は何心なく目を開けば、明る九ツの時刻なり。泊りやよりは度々の呼使ひ、森が關親方は賴まれし席淨るりむだ事となりければ、せめて座敷をも仕て渡さんと、世話を仕ても火急の事故、今宵は我宅にて語らせんとて此方からも呼使。去ば夫より秀女の宅にて厚き禮を述、頓て泊りやへ歸り、此夜は森が關の家にて座敷を催し、先始りの語り物、信仰記碁立の段園太夫、次に實太夫あしやと二代鑑と語りければ、當所の諸人は土地の產れの秀女此宮の兄弟子の實太夫と云事早聞へ、殊さら秀女と席爭ひ有て世の義理合にて立別れ、程なく當所を立歸るよしの事まで聞へ、森が關にて名殘の淨るりなりといひ立、此夜爰に聞に來る人は山のごとくなり。是が故に實太夫も爰に名を殘し立去跡にて秀女の席も大評判となり、古今無双の大入をなしたると聞傳る。されば實太夫は諸人に尊敬、又明る日も森が關はじめ諸方にて酒宴に招かれ、秀女の方にて又出立祝ひとて馳走になり、明れば早々出立に定りける。

されば此佐野宿より壹里斗南、越名宿と云所有て、實太夫が森が關にて語りし事越名へ聞へ、此宿にて座敷を催し致度よしにて、林屋正助という咄し師此事を賴まれ馳來り、實太夫はいづれ其地へ歸り道なり、元よりあすは發足の事なれば、兎もあれ其地へ可參と返事をすれば林屋も大に悅び、其日も過て、明れば早々林屋に伴はれ越名宿へと急ぎ行。

越名宿座敷の事
並竹本實太夫江戸ゑ着の事

越名宿といへども當所は元より佐野の領分にて、則淨瑠璃座敷を催すると云席は川岸にて、西面の海上は江戸へ三十里にして江戸通ひの船場なり。されば淨瑠璃の席は須藤貞司（ていし）というて、これは席場にてあらず。元來醫師にして、片店は萬屋というて何にかぎらず萬の物を商ふ家なり。故（かるがゆへ）に、淨瑠璃を始ても處の風にて木戸錢を取らず、下足のはき物をも預らず。聞く輩は人がらよく、旦那衆數多有て、淨るりを聞に來る時は鳥目百文出すもあり、又四十八文もあり、或はだんまりにて淨瑠璃を聞て立歸り、後より南鐐百疋持せ來るもあり、又は二十四文三十貳文を表へ渡すもあり。いづれも紙に包て渡しける。元より興行にて御上へ願書にも及ばず。

既に明る日より初日始し所、評判よく大入大繁昌はすれども、せまき所なれば日數五日を興行して目出度千秋樂をするなり。猶其後にて同所居酒屋中尾忠吉郎宅にて座敷、又御好に附て又壹段永島七兵衞にて一會、又元の席元須藤にて一會、大傳馬屋の千代まつ、中嶋儀兵衞各々座敷の數八九ケ所、皆夫々に面白き事樣々あつて、淨るりこのみかたるを上手もあり、聞に上手もあり。

實太夫藝の德にて此たびはじめて剛染になりて、千年も剛染たる如くちかしくなり。又も何日此所に來る不來（こぬ）の捨別なく數多の黃金を貰ひ、既に當所にては過分の金儲する事これ偏に師のかげは目のあたり。爰におひて入組でくわしき事樣々あれ共、當所は格別文談長ければ是を略しける。

扨も實太夫は万吉園太夫を召連日光道中恙なく、過分に儲しこがねすくなからざれば、道中をあんじ思案をして思ひ付、當所にて長き絹を求め、打替の胴卷をこしらへ金を納むるに拵へ、金壹兩で樋（ひのき）切をして細長く胴卷におさめ、己が肌身と襷にかけ、其うへに着物を着したる事のこゝろよき事是をすぎず。されば是より、江戸表僅に四夜泊りにして、歸り道に席淨るりの有所もとほしければ、實太夫始二人の者只江戸へと心せきて、しひて其身の働く事をおしみ、歸國のみを望みければ實太夫つら〳〵思ふには實に光陰矢の如く、抑我々江戸表を出しより餘程隙取し事なれば、江戸におひて師匠のきげんの程

もいかゞなれば、三人共心を合し、いよ〳〵當所より直樣歸國とこそは極りける。

されば實太夫は當所贔負の方々へ厚き禮を述、出立と云しかば馴染の人々大に名殘りをおしみ、今暫く逗留を勸められけれども、此せつは大呂故やゝともすれば雨催す。天氣宜敷うちに少しもそう〳〵歸宅いたし度といひて暇を貰ひ、明る早天に林屋正助はなをさら名殘をおしみ、野はづれまで見立くれて、いそぎ越名宿を出立して二里半歩行、藤岡という所にて中食をすれば正助諸共酒酌かはし、正助は元の越名へ立歸る。

夫より三人は二里半歩行、此所より日光街道へ出る道有て、元きたる小川宿へ這入し所、空は次第に黑雲おこり、どふか雪空なれば此日は漸々六里の道なれ共當宿兩國屋杢兵衛に泊しが、此夜より大雪降出し、夜明て見れば白雪壹尺斗り、是は如何せんと思ふ所、此行先の宿は前になが逗留したる粕壁宿なれば、万吉は此宿まで行て又高砂屋にて逗留せん志あれば、一無心に先の宿へ急ぎける。實太夫思ふには、此粕壁は前に泊りし時高砂屋にて万吉が此家の娘と不義をして、所の若者共に既にすまきに逢べき事ありし所なれば大に禁物也。万吉は若氣ゆへ其事にこゝろ付ず。故に實太夫は謀を設けて、此所にて草加宿迄通し駕籠を申付、大雪の事なれば駕籠を雨どひにて深く包ませ、早天より小川を出立し、程よき所にて中飯をさせ、首尾よく粕壁の宿を通り拔、むりむたひに駕籠を急がせ夜四ツ時に草加宿の伊勢屋三右衛門に泊りける。

其時万吉は駕籠よりおりて髮を粕壁と心得、泊り屋も高砂やなりと一途に思ひ、奥の座敷へ行までも是をしらず。やがて給仕に出來る下女をあれ是跳しが、先に來たる時の女共とは相違してある故少し心付たる樣子なり。實太夫園太夫は飽までもてうろうして見んと、實太夫云けるは「下女と云ものはすこしの間にかはるものなり。殊さら旅籠屋なぞはなを〳〵替り易きものなり。最前髮へ這入時に娘のおそよは見付得ね共、妹のおきくは一寸逢たるが、何分今宵は大客にていそがはしきとあるゆへ、今におそよも來るであろ、併万さん。寢る時はまた先のようであろう。定ておたのしみなり」と、てうらうすれば、万吉が思ふには「いかにしてもふしぎなるは、先に來た時は、此樣なる座敷はあらざりし」と、いへば實太夫「ソリヤ其筈の事、我々此度は御客人ゆへ此上段の間へ入たれ共、先の時は藝者故裏の離れ座敷へ押込られたるなり」と、誠しやかにいへば、万吉はまただまされしや、夫より頓て風呂へ入べしとのしらせに下女が來たるゆへ、先實太夫風呂へ這入、次に万吉にて、風呂場へ行に勝手をしりたりと下女もつれず。園太夫わざと打捨置ば、はじめての風呂場なれば道しれず。うろ〳〵とどうに迷ふ内に餘人に咎められ「お前さまは何所へお出なされ升」と、いへば万吉「ハイ、私は風呂場へ」という。

余人がいうは「爰らに風呂場はござりませぬ。風呂ならそちらへお出なされ」万吉は「イエ〳〵私は勝手をよくぞんじており升」なぞと云故餘人もあきれて、此人は氣違ひかと笑ひながら行過る。されば風呂の場所は一向にしれず、そつちこつちを迷ふて漸々の事に尋當りしが、風呂場の違ひし樣子に心付しとあり　園太夫は万吉の風呂よりあがり來るを餘りおそきゆへあんじ詫て、我もいづれ風呂へ這入事故、迎ひがてら風呂場へ行て、又々万吉をたぶらかさんとすれ共、今度は万吉心付てや大に腹を立、双方せり合ながら座敷へ戻る。

されば實太夫は万吉が風呂場にてだまされし事立腹するはしれてあれば、酒を呑せてすかしなだめんと、早くも酒肴を取寄てある所へ風呂場より二人共戻り、案に違はず万吉は腹を立居れば、實太夫ちやらりくらりと生つ殺しつはやし立、無理に進むる田舍の新酒、早くも醉てたわひなし。長の旅路の末の宿、うさを忘るゝ今宵のしやれ、明日は目出たくお國入、道草さま〳〵記錄にのこし、思はず更し假まくら、寢伏ては何事もそよ吹風も白雪と、只夜の明るを松が枝に、とまる烏のかあ〳〵ゴン。

明れば早々立出るに、雪は高くも積りあれど、諺にいう雪のあしたとは是なるかな。昨日に引替上天氣、雪の中を行も一興と、身輕に出立三人は雪中いとはず行足は早くも千住を打越て、お江戸の町へとさしかゝる。七里餘りを程もなく、日本橋の邊りなる師匠の宅へ歸りける。

金屋橘氏美吉良事新兵衛明俊一代記

（第六の巻）

目錄

天保二辛卯十二月五日
一竹本實太夫日光下向して師の家に着の事
同年八月三日
一竹本實太夫浪花へ歸國出立の事
一品川宿にて座敷の事
並寄淨瑠璃興行の事
並實太夫茶屋遊行の事
一竹本實太夫道中の事
並藤澤にてざしきの事

竹本實太夫日光下向して師の家に着の事

去程に實太夫が師匠染太夫の住所は、先に云日本橋小松町なり。師も是まで當所にて彼地此地に住居致されしかども、兎角に火事早き土地なれば、度々類燒して變宅せらるゝ中にも、杉の森新道にては夥しく普請を被好、はづかしからぬ家にてありしが、去冬十二月に又もや燒被出、夫よりは此小松町に借宅を被致けるが、實太夫も同樣に類燒に逢、當時鐵砲町に借住居をせしが、是も先に云通り御當地淨瑠璃寄場御差止に成しにつき、實太夫は家を片附、日光參詣をせし事なれば、此度日光より歸國にも實太夫の家とてはあらざりける。

斯て、實太夫の三人組天保貳年辛卯極月五日の夕方に小松町なる師の宅に立歸る。師匠夫婦はじめ弟子中とも對面し、爰に落着、夫よりして日光道中の咄しをすれば皆々腹を抱へて打笑ひ、師匠夫婦も滿足なりとの機嫌に縋り、此夜より實太夫二人を連ての居喰人、實に大樣なるくらしなり。

既に今年も弟月と打過て、頓て目出度初春は何國もかはらぬ蓬萊と祝ひ祝する辰のとし。扨も正月の上旬より、堺町土佐座におゐて操りくわへし大芝居、八陣守護の本城なり。三段目は染太夫役場、三中は實太夫役場なり。此芝居大當りにして桃月になり、替り外題本朝廿四孝、三段目は師匠染太夫、同じく三中實太夫にて、是も大入をしてうち仕舞。さつき月には

木挽町の芝居へかわり、此芝居は伊達嶽にて、江戸大立者津賀太夫加はり三段目埴生村を語る。此中語り實太夫なり。師の染太夫附物に吃の又平を被勤て、此芝居も長らく續ありけるが、頓て夏の景色に趣ければ、しけき暑さに餘義もなく榮し芝居はうち仕舞、秋を待つ間のなか休み暫く身をもくつろげる。

去ば實太夫は師の方に万吉園太夫倶に居喰人して居たりし折なるが、實太夫は大阪に兄と姉との兄弟有。兄はいづみ屋平右衞門とて大阪長堀住友の流れのすへの者なるが、壽五十路に近かりしが不斗病氣に取含、追々長病となりて最早いづれは冥途へ出立なりと心細かりしに、弟實太夫に逢見を仕度とあつて、一先上方へ登りくれ度よしにて書面を出されける。あるとき實太夫の方へ彼手紙到着せし所、實太夫早速披見するに右の體なれば大に驚き、兎にも角にも替りなき兄上の事なれば一時も早々馳付んと思へ共、我師匠も國を捨親類を捨て此東都へきたられし事是はいわずとしれし事なれば、大恩の師を捨て當地離るゝいわれあらざれば、此事暫く打捨ありし所、師匠染太夫毎夜々々寢酒を呑るゝせつ、實太夫を酒の相手にせらるゝ事常に變らねば、ある夜實太夫はいつもの如く、師匠の酒の酌をして我も盃を戴、浮世咄しの其中に師の云るゝは、

我は久敷此江戸に住居するも、あまり長かりければ來春にはぜひ共上方へ登り、大阪の芝居をも出勤致度、斯長々と當地に居ては藝道の爲に惡し、なんじも同じ事なれば我等が上阪のせつよりは半年ばかり先へ登り、可然住家を大阪堀江にて見付當地へ知すべし。さあらぬ時は我等上阪の砌、住家定かなければ差當りて迷惑すべし。故に此義を申付べし。

と、おもき上意に實太夫、爰ぞ願の折なりと、師に向ひていひけるは、

我兄平右衞門と申者、上方にて此度病氣に取逢、弟の私に頻りに對面致度よしの書面到着仕候へ共打捨置申候、併私には只今親とても御座なく、當時親同然の兄、若や世をさられなどせられては、ほひなき事とぞんじ候。

と、咄しをすれば、染太夫も此事聞、尤なる事と思されて實太夫に云けるは、

只今其方に申遣し候とふり、我等もぜひ共來春歸國をすれば、其方は急ぎ支度して上方へ登り、兄の先途も見屆しうへ、我等が用事も達せよ。

と、心をも込し一言に實太夫大に悅び、

仰に隨ひ御暇賜はるべし。併ながら、私師の御蔭にて當所に知る人多く御座候へば、最貧の方々へ暇乞致度候。いづれ出立とても火急の事にまゐりもふさず候。何さま只今より支度御めん下さるべし。

と、急ぎ調度にとりかゝりける。

扨も實太夫は師の御恵み須彌山よりも高く、此度上阪に付荷物をとゝのふ事、世帶道具の小間もの、あらかじめ夜具類に至まで長持にて廻船に出し、着類は夏冬共に七十貳品、夫に應じて帶類提物等は飛脚荷物に出せり。是記錄に改めて記すもはづるべけれ共夫は世の中一通り、諸人の事なり。此實太夫は幼名美吉良とて、太夫の道をも得しらぬ者なりしが、六ヶ年以前師の供をして此東都に來たる其時は、着物といへば夏冬とも漸々五ツ品に足る不足にてきたりしに、斯まで諸事の品を拵らへ、其身は芝居にて淨るり語りとまで立身するも、偏に師匠の御恵深かりし事の嬉しさ餘りて恥しさを不顧、我身懺悔の爲記錄にのこして子孫に傳ふものとか。

さわ去ながら實太夫は己が身は類ひなき仕合せすれど師匠へ孝の印なく、何をがな師匠へ恩賞のかたちを出立に殘さんと只一すじに心をはけみ、爰に一ツの智略を廻らしける。さればこの事は師匠の身に取ては瑕瑾の咄しなれ共、記錄なれば書記す。染太夫此東都におゐては借財事というは外にはあらざりしが、御贔負の旦那先二軒に證文有し借財、兩家にて百兩ばかり有ければ、師は明暮此事を苦にせらるゝといへ共、はした金にあらざれば借財其儘におこたりある事なり。爰におゐて實太夫は上方行に付諸方の知べ〳〵へ暇乞に行事なれば、師の借財ある旦那衆には別してあつき禮をのべ、いとまごひする咄しの中に、私事此度歸國致すに付、師匠旦那にての借財、是のみ心にかけられ候へば、なにとぞ御當家借用金師のかたへ德政なし下さらば、師匠は一志の苦患をのぞかれ、拙者とても孝行と相成候へば、何卒師弟を御助賜われかし、生々世々の御情と、顏押拭ひて賴みし所、先方には此金の事常にせひらくはいたされねども、證文もある事なればいかゞ相成事なりと金の冥利に申出しては居たれ共、今其方師匠の心を休めん爲、德政をたのまるゝ事神妙なり。然ば其功にめんじて此金子無財にして證文進上いたすべし。とあつて、早速師の被認たる證文に熨斗をつけて、實太夫是を戴しときの嬉しさは何に譬へん方もなく、其上實太夫も出立のせんべつに黃金過分に戴、名殘りをおしみ引別れける。斯て今一軒の借財ある旦那にても如斯に證文をもらひ、分て此旦那にては實太夫二十兩ばかりの品物を餘慶に貰ひける。

されば實太夫は師の宅へ歸り、眞斯々の咄しをしてかの證文を渡しければ、師匠も滿足し、是にて實太夫師の恩を謝しゝ事是も我力にあらず、有し師弟子其功を達するものならん。扨此兩家斗にあらず、暇乞に廻わる先々は皆師匠引法にて、何れの方にても一々餞別の酒盛りとなる事故、一日に漸々壹貳軒にて日を暮せし故其日數久敷かゝり、辰年六月より支度に取か

編輯後記

◇本輯の編輯〆切の日に、私の机上に齎らされた新しい一異色のある新雜誌がある。ソハ南江二郎氏が編輯出版にかゝる"MARIONNETTE"といふ藝術の香の高い人形芝居に關する本邦唯一の雜誌である。そしてこの二月十五日發行がその創刊號である。

◇編輯者であり經營(?)者であり、執筆者である南江氏は「人形劇の研究」「原始假面考」などの高著を以て知られてゐる篤學の士である。經營者に私が?をおいたのは、この特種なる雜誌を果して「經營」といふ言葉を用ひていゝかどうかを疑つたからである。經營といふ言葉を用ふるよりも、南江氏が人形芝居に關する眞摯なる研究を印刷に付したる立派な報告書といつた方が當つてゐるのではないかと思ふ。

◇百部限定豫約出版、非賣品で贊助會員、普通會員に頒布されるといふ特種出版である。

◇四六倍版、表紙上に金題字があり、下は糸操の糸を金線で出してゐる清楚にして高雅なる表紙、操、希臘古面の圖など盡く別頁アート紙に贅澤に印刷されてゐる。巻頭坪內博士、高野瑚山博士その他の「偶人劇」に對する意見の片鱗を二度摺りで印刷せるなど日本において稀に見る高級雜誌の唯一に屬する。

◇南江氏の執筆にかゝるものは、「生物機制學と人形芝居」「無言劇と詩劇の一考察」「東洋諸國偶人劇考」など。その他では人形芝居の景事(小寺融吉氏)人形劇舞台裝置への一つの提案(遠山靜雄氏)エピソックに關するノオトから(佐藤一英氏)人形廣淺觀(馬場孤蝶氏)その他である、

◇編輯者南江氏の意圖は、實際方面の運動にては諸外國の糸操の研究から進んで本邦糸操の傳統を繼げる結城孫三郎氏一派の操に新生命を吹込み、新糸繰りの一派の確立にあるが如く眺められた。そして學研的の立場からは、これらの實際運動に資する研究資材の忠實なる研讀にあるものと觀て誤りなきに遮からんか。

◇この心惹かるゝ立派な新雜誌を見て、私の今關心を持ち研究しつゝある人形芝居の立場とは違つた方法、違つた道ではあるが、畢竟ずるに到達せんとする峰は略同じものではあるまいか。

◇私は新たにこの好侶伴を得て喜ばしさの余りに、百部限定のこの新雜誌が、余り世間に知られないのではあるまいかと思ふので、この機會に我が「演藝月刊」の讀者に、この篤學者の篤志なる研究發表新雜誌の生れた事を報告するとともに、この新しいものゝ健やかなる發達を、心かち祈つておくものである。

◇發行所は京都府綾岡町字河原町郷土演劇協會である事を付記する。

◇本輯の「演藝月刊」は、劇評に今一段の力を用ひようと初めに計畫したが、例の如く紙數の超過を虞れて又生半じやくのものとなつたのを遺憾とするが、これも致し方がない。

◇來るべき時節を靜かに待つ外道がない。夜道に日が暮れない諺の如く、ゆつたりと、私は私の仕事に進みつゝある事を御報告だけしておく。(石割記)

梅が枝

庭の梅がわ命の君に、何が惜かろぞ花ひとへ咲いたの、さいた〳〵何がをしかろぞ花ひとへ咲いたの。——松の葉——

昭和五年二月廿日發行

月刊雜誌『演藝月刊』第九輯

一ヶ年 前金 參圓五拾錢

廣告料金 一頁 五拾圓

定價金參拾五錢(郵稅五厘)

昭和五年二月十五日印刷
昭和五年二月二十日發行

編輯兼發行人 堺市車の町東三丁一番地 石割松太郎 電話堺一二一八番

印刷人 大阪市北區堂島濱通四丁目八番地 高橋印刷所

發行所 堺市車の町東三丁一番地 演藝月刊社 電話堺一二一八番 振替大阪八五五九七番

大賣捌所 大阪市淺速區南海通 波屋書房 電話戎四一一四番

大阪毎日新聞

朝刊　十頁
夕刊　四頁

刊行物

日刊	英文大阪毎日	定價 一ケ月 一圓廿錢
週刊	サンデー毎日	定價 一部十二錢 一ケ月四十錢
週刊	點字大阪毎日	定價 一部十錢 一ケ月四十錢
月二回	雜誌濟エコノミスト	定價 一部三十錢 一ケ月六十錢

世界一の蛔蟲驅除藥（專賣特許）

マクニン錠

一・四〇　一・〇〇　一・八〇　九・五〇

蟲下し菓子

マクニンゼリ

二・五〇　二・〇〇　一・〇〇

國の始めは大和の國、郡の始めは宇陀の郡、一番安心で最もよく効く蟲下しはマクニンが始めで、唯一つ。

藤澤樟腦プルトーゼ本舗
大阪道修二　藤澤友吉商店

『恐ろしい蛔蟲』と題する册子あり御申越次第進呈

昭和四年六月二十九日第三種郵便物認可
昭和五年二月二十日發行（毎月一回二十日發行）
寶藝月刊　第九號